

地域連携による初年次教育プログラムの実践的研究

—学生による地域プロモーションビデオ制作—

井関崇博*、豊田光世**、中寫一憲*、三宅康成*、山村 充*

*社会環境部門、**人間環境部門

Developing First-Year Program for Community-Based Learning: The Educational Effects of Making Promotional Videos about Local NPOs

Takahiro ISEKI, Mitsuyo TOYODA, Kazunori NAKAJIMA, Yasunari MIYAKE, Mitsuru YAMAMURA

School of Human Science and Environment, University of Hyogo

1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: This research aims to develop a new program for first year education with a view to cultivating students' abilities to work in groups, to conduct case studies, and to analyze and present their findings in a creative way. In this program, each group was assigned a case study of an NPO in Himeji area. Five or six students work in a group and conduct research on the target organization. They interviewed NPO workers and participate in social activities to deepen their understanding of the organization. In the end, each group shared the result of the study through powerpoint presentations and short films. Survey was conducted to analyze the responses of both students and local NPO workers to this educational experiment. The survey shows that this program contributed developing students' interests in social activities. NPO workers also evaluated this attempt positively as an approach to co-develop project-based learning that could offer merits both for students and NPOs.

Keywords: Higher Education, First-Year Program, Community-Based Learning, Promotional Videos

1. はじめに

日本の大学教育は大きな改革のただ中にある。大学がグローバル化、不確実化する現代社会で必要とされる人材を十分に育成できていない一方で、大学全入時代となり、十分な学力や意欲を有しない学生が増えてきている。いかにして質の高い教育を実現し、社会の期待に答えていくか、さまざまな概念や理念が提唱され、また、様々な方法が開発されている。文部科学省では学士力が掲げられ、一連のGPプログラムにおいて新しい教育方法等の開発が促されてきた。経済産業省では社会人基礎力が提唱され、それを育成する取り組みを支援してきている。

本研究で着目する「初年次教育」もこのような動きの中に位置づけられる。初年次教育とは学生が高校生活からスムーズに大学生活に移行できるようにすることを目的として、1年次に行う教育のことであり、2000年以降、多くの大学で取り入れられるようになった。各大学での取り組みは多岐にわたっているが、川島(2008)はこれを①スタディ・スキル系、②スチューデント・スキル系、

③オリエンテーションやガイダンス、④専門教育への導入、⑤教養ゼミや総合演習など学びへの導入、⑥情報リテラシー、⑦自校教育、⑧キャリアデザインに分類している。初年次教育に関しては各大学における実践報告や全国の大学の初年次教育への取り組み状況の調査研究などがある(河合塾編, 2010、谷口, 2012)。

本研究もこのような一連の取り組みの中に位置づけられるものであるが、その特徴は初年次教育に「地域連携活動」を導入するという視点と、それをプログラムとして構築し、それを実際に実践することでその可能性と課題を検証する点である。

以下では、まず、新しい初年次教育プログラムについて、その教育目標とそれを達成するための教育プログラムの概要を説明する。次に、これを兵庫県立大学環境人間学部1年後期必修科目「基礎ゼミナールb」(以下、「基礎ゼミb」と表記)で実践したときの概要とその結果をまとめ、最後にこのプログラムの可能性と課題を考察する。

2. 学生による地域プロモーションビデオ制作

2. 1 プログラムの概要

本研究で提案し、検証する初年次教育プログラムは、学生が数人でグループをつくり、地域で活動する団体を取材し、そのプロモーションビデオを制作するというものである。そのプロセスは以下の通りである。(図1)

- ① 教員が地域で活動する団体を取材対象として複数選定する。
- ② 学生が5人程度のグループに分かれ、グループ内で役割分担しながら担当する団体を取材し、数分間のプロモーションビデオを制作する。
- ③ 教員は各グループに対してマナー・技術指導と活動環境整備の2つの側面から支援する。
- ④ 制作されたビデオは外部者評価を取り入れたコンテストで競われる。
- ⑤ 完成したビデオは団体に提供するとともに、その承諾を得て学内やインターネットで公開する。
- ⑥ 教員は各団体のビデオに対する評価を学生にフィードバックするとともに制作プロセスの振り返りを促す。

2. 2 教育目標

ここでは教育目標として能動性、創造性、協働性、社会性を設定した。まず、それぞれの意味を説明する。

1) 能動性

初年次教育の目的の一つに受動的な学びから能動的な学びへの転換がある。多くの学生は高校までは学ぶべきこと、行うべきことを教員に事細かに指導される環境の中にいた。「～しなさい」「～してはいけない」と常に指示される中では受け身の姿勢が染みついてしまいやすい。しかし、大学は学生の「能動性」を前提とする場である。そこにおいて教員はあくまで支援者である。したがって、学生は大学の早い時期にこの能動性を獲得する必要がある。

能動性は実社会においても求められる。経済産業省が提示する社会人基礎力でも「前に踏み出す力」が一つの柱とされている(経済産業省, 2006)。若者を批判する言葉に「指示待ち族」があるが、このような姿勢では組織の側も困るし、本人にとってもさまざまなチャンスを逃してしまうという意味で不幸である。このような能動性をいかに早い段階で身につけるかが課題である。

2) 創造性

高校までは試験・受験への意識が強いゆえに「正解」を言い当てるといった姿勢が形成されやすい。しかし、大学ではレポートや論文のように与えられたテーマについて自らの主張を展開することが求められる。そこでは自身の知識を活用しながら何らかの新しいアイデアをひねり出し、それを「形」にすることが求められる。これをこなすには新しいものを生み出そうとする姿勢すなわち「創造性」が必要である。ここでいう創造性は芸術的な意味ではなく、課題を自ら設定し、それを乗り越えるために自分なりに考え、情報収集し、アイデアを出し、具現化していく姿勢のことを指す。課題解決力といってもいいかもしれない。大学のできるだけ早い時期にこのような創造性を身につける必要がある。

能動性と同じく創造性も実社会において重要である。与えられた仕事をしっかりとこなすためには、あるいは求められる以上の成果をだすためには、これまでにない目標設定や方法を考案し、それをやり遂げなければならない。変化の激しい現代社会では創造性は極めて重要な素養である。

3) 協働性

近年、人それぞれの個性を重視する傾向が高まっているように思われる。しかし、個性の追求は集団や社会とのかかわりの中で発揮されなければ意味がない。集団や社会とのかかわりを失った個性追求は孤立や自閉化に陥ることになる。自身がかわりをもつ集団の中で何らかの役割を担う中でそれぞれの個性は意味をもつのである。

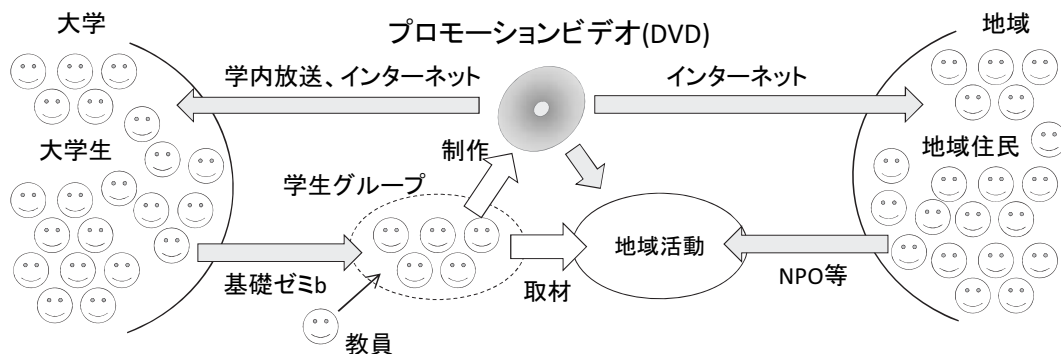


図1：教育プログラム「学生による地域プロモーションビデオ制作」の概念図

集団活動のために自身の個性を生かしていくこと、あるいは逆に個人の個性を尊重しながら集団活動を営む力が必要といえる。ここではこのような力を協働性とよぶことにする。

実社会において協働性が重要なのは言うまでもない。実社会で求められる協働はいわゆる仲よし同士の協働ではなく、立場や能力、考え方の異なる人同士の協働である。また、チームビルディングという言葉が示すように、実社会で求められる協働は一人ひとりが異なる役割を担うことによって全体の目標を追求するというものである。このようなチームワークの作法と技術としての協働性を大学の間身に身につけることが重要である。

4) 社会性

大学教育は学生が実社会に出る前の最後の教育課程であり、それゆえに大学のうちに一定程度の社会性を身につけておく必要がある。ここでいう社会性とは、家族や友人、学校といったそれまで身近であった領域の外側に位置づけられる実社会に関心を持ち、それについての知識やルールをある程度もった上で、それに自ら関わろうとする態度のことをさす。

近年、このような趣旨からフィールドワークやボランティアが大学の教育課程に取り入れられるようになった。しかし、これらのプログラムは実際にはキャンパスの外に出ていながら、社会の表層を一方的に見学するだけのものになってしまいやすい。社会性を育成するためにはより深いかわりが必要であり、学生の側が実社会の誰かに働きかけたり、あるいは何らかの役割を担ったりする中で形成されるものといえる。

2. 3 プログラム構築の意図と工夫

本研究では上の4つの教育目標を設定して、地域プロモーションビデオ制作という教育プログラムを構築した。以下でプログラムの各要素が上の教育目標とどう関係しているかを説明する。

1) 課題を地域プロモーションビデオ制作とすること

本プログラムでは具体的な課題（成果物）を「地域プロモーションビデオ」とした。これは地域の人や団体、事象の魅力を表現する動画のことであるが、単なる作品ではなく、対象に対する関心を喚起するという明確な目的をもった動画のことである。このような課題とした理由は以下の3点である。

第一に、「社会性」の育成である。大学で学生が取り組む課題のほとんどは教員に提出するものであり、結局は自分のためだけのものである。それに対して、プロモーションビデオでは必ずプロモートすべき相手がい

また、それを見せるべき視聴者がいる。そして、取材においては実際に実社会で活動する人にアクセスしなければならない。つまり、ビデオ制作の過程で必ず実社会の誰かを意識し、また、その人と関わらなければならない。このような環境におかれることによって学生の社会性は育まれるものと考えた。

第二に、「能動性」である。現在の大学教育では最終成果物が試験あるいはレポートであることが多い。この場合、評価者は「教員」であり、評価基準は基本的に論理的・経験的な「正しさ」である。このような課題に能動的に取り組むためには、当該専門分野に対して強い関心を持っていなければならない。他方、プロモーションビデオで重要となるのは「視聴者」であり、それは「取材対象の方々」と「身近な友人・家族」を含む不特定多数の人々である。評価基準も「インパクト」「メッセージ性」である。ゆえに、相対的によりよい成果物を作ろうとする動機づけが強く働くと思われる。加えてプロモーションビデオはテレビやインターネット等で身近に触れてきたものでもある。以上から、プロモーションビデオという形式は学生の能動性を引き出しやすいと考えた。

第三に、「創造性」である。プロモーションビデオは「正解を探す」という姿勢ではつukれない。自ら調査する必要があるし、調査で得た情報だけでなく、これまでに自分が見てきたさまざまな映像を思いめぐらし、要素を組合せ、編集していかなければならない。こういう課題の中で創造性が引き出されるものと考えた。

2) 取材対象を特定の団体・人とすること

地域に関するプロモーションビデオの取材対象として抽象的なテーマを選ぶことも可能であるが、ここでは具体的な地域団体とした。その理由は以下の2つである。

第一に、「能動性」である。大学で出される課題の多くは学習のための仮想的な課題であり、それに真剣に取り組もうが、そうでなかろうが、現実には誰も困らない。しかし、その課題に取り組むことが誰かに影響を与える、あるいは誰かのためのものである場合、それに取り組む意義を感じやすい。特にその相手が自分の知り合いなどすでにある程度のものである場合、それに取り組む意義を感じやすい。特にその相手が自分の知り合いなどすでにある程度のものである場合、それに取り組む意義を感じやすい。特にその相手が自分の知り合いなどすでにある程度のものである場合、それに取り組む意義を感じやすい。

第二に、「社会性」である。通常の大学の人間関係は学生、教員、アルバイト先の3つに閉じられがちである。学生の早い時期にこれらとは異なる人と話し、やり取りする機会を設けることで、その後の視野は広がるはずである。また、そこで築いた人脈は学生のその後の人生

において生かされる場合もあると考えられる。

3) 競争関係と外部評価を取り入れること

本プログラムではコンテストという方法でグループ間に競争関係をつくり、さらに外部評価を取り入れた。このような形とした理由を以下に述べる。

第一に、「協働性」への動機づけである。協働性を育むためにはグループ活動を取り入れなければならないのは当然であるが、その前提にはそのグループに対する帰属意識が不可欠である。そこでグループ間に競争関係をつくることによって所属グループへの帰属意識を高めることを考えた。他のグループに負けない作品を作るためには、メンバー同士で協力しなければならないような環境をつくることで協働性が育まれるものと考えた。

第二に、「創造性」を育むためである。競争関係は創造性を育む一つのきっかけになりうると考える。ここでいう競争関係とは最終成果物の出来栄だけを競いあうものではなく、互いに触発し、よい点を学び合うという切磋琢磨する関係のことである。このためには相互の進捗や構想を共有する必要がある。そうすることで各グループの作業内容や最終成果物のレベルが向上してくると考えた。ただ、競争のデメリットとして勝つこと自体が目的化したり、敗者のその後の意欲をそいだりすることが考えられるので、実施においてはこのような意識にならないよう教員が適宜説明していく必要があるだろう。

第三に、「社会性」の獲得である。実社会は競争で満ちており、それから逃れることはできない。他方で、実社会は多様な人々で構成されており、成果についての評価も多元的である。このような社会の両面性を体験することが学生の社会性獲得にとって重要と考えた。このような観点から、本プログラムでは外部評価において〇×といった最終判定だけでなく、各作品に対する具体的なコメントや学生へのメッセージを書いてもらう必要があったと考えた。

4) 教員の介入を限定すること

本プログラムでは教員の介入をマナー・技術指導と活動環境整備、受動的相談（学生からの相談を受けたときに限って対応する）に限定する。その理由は「能動性」を育むためである。教員が学生の活動に介入すればするほど、学生は能動的に行動する機会を失ってしまう。どのような調査を行うか、どれほどの調査を行うか、団体のどこに着眼するか、どのようなタイプのビデオを目指すか、どのようなスケジュールでビデオをつくるか等は学生が自ら決めるべきものとした。ただ、自由というだけでは易きに流れる場合もあるので、それを回避するために競争関係をつくり、緊張感を与えることとした。方

法や内容は自由だが、結果は自らが引き受けなければならないという環境の中で学生の能動性が育まれるものと考えた。

ただ、学生が頑張ろうとするのは応援されていると感じられる環境においてであり、自己責任というだけでは不十分である。そこで、最低限のものとしてのマナーや技術に関する指導と、申し出があればしっかりと対応する環境を整えておく必要がある。このような自由と競争、そしてサポート体制の中で能動性が育まれていくものと考えた。

3. 兵庫県立大学環境人間学部での実践

3. 1 必修科目「基礎ゼミナールb」

本研究では2. で提案した教育プログラムを、兵庫県立大学環境人間学部の1年次後期必修科目基礎ゼミbで実施することとした。

本科目は同学部でスタディ・スキルの習得等を目的とする必修科目である。学部全体で200名弱の学生を十数人の教員が分担して担当しており、担当教員は自身の専門性を加味して実施することになっている。配属にあたっては、まず、教員が授業内容をシラバスで示し、それを見て学生が希望を出し、全体調整後に配属決定される。今回の取り組みは同科目を担当する教員5名が共同で実施したものである。

3. 2 取材対象と学生グループ

取材対象として姫路市内の以下の9つの市民団体を選定した。選定の際には、活動内容が充実していること、団体の側に地域や学生にPRしたいというニーズがあること、全体として活動分野が偏らないことを考慮した。

- ① チーム Web
- ② NPO 法人生涯学習サポート兵庫
- ③ 姫路おでん協同組合
- ④ NPO 法人姫路地区手をつなぐ育成会
- ⑤ 子どもミュージカル劇団・FUNKY キッズ
- ⑥ NPO 法人姫路コンベンションサポート
- ⑦ ふるさとの原風景再生プロジェクト「太市の郷」
- ⑧ NPO 法人スロースサエティ協会
- ⑨ 亀山御坊薬市楽座実行委員会

他方、学生はまずくじ引きでグループを結成した。そして、各グループの取材先についてもくじ引きで決定した。くじ引きできめたのは、実社会では自分の好き嫌いで同僚を選んだり、仕事を決めたりできないという現実があり、それを体験してもらうためである。くじ引きの結果、①、②は6人のグループとなり、それ以外は5人

のグループとなった。

3. 3 実施体制 - 地域連携

実施体制としては、まず、担当の5人の教員が中心となり、コンセプト形成と授業計画作成、各回の授業の実施、各グループの個別サポート、発表会の実施、報告書の作成等を分担して担った。個別サポートに関しては各教員が2グループを担当する形とした(9グループゆえに1人は1グループ)。各グループが対象を取材する際には原則、担任する教員が同行することとした。

なお、機材に関してはビデオカメラと三脚を3セット用意し、各グループの取材の申し出に応じて貸与した。パソコンは大学のPC教室に設置されているものと、それぞれの自宅のパソコンを使うこととした。

また、実施にあたってはNPO法人コムサロン21を地域側のパートナーとし、取材対象の推薦と団体への依頼を担っていただいた。また、実施に際してのさまざまな助言をいただいた。

さらに、上記の9つの市民団体も本プログラム実施の担い手といえる。本プログラムの趣旨に賛同していただき、取材に訪れる学生に活動内容を説明したり、あるいは団体の活動への参加を認めていただいたりした。さらには、必要に応じて学生に対して教育的なかかわりもしていただいた。

3. 4 制作プロセス

制作プロセスは大きく3つに区分することができる。第一期は主に団体の基本的な事項について理解する時期、第二期はさらに理解を深めつつ、プロモーションビデオのテーマとストーリーを検討する時期、第三期はプロモーションビデオを制作する時期である。第二期の最後に中間発表会を、第三期の最後に最終発表会を開催した。表1に各回の内容を示す。

表1：地域プロモーションビデオの制作プロセス

第一期	<p>第1回 10月6日：趣旨説明・グループ分け 自己紹介とグループ分けを行った後に、キャリア教育としてライフデザイン演習を実施した。授業の最後に、姫路プロモーションビデオ制作プロジェクトの狙いを説明したうえで、今回対象とする地域活動団体を紹介した。また、プロモーションビデオの制作プロセスの概要を説明した。</p>
	<p>第2回 10月13日：プロモーションビデオについての理解 良いプロモーションビデオとはどのようなものかを考えるために、以下の4本のPVサンプルを視聴し、ディスカッションした。 「ゆめきらマグネットについて」「中部リサイクル運動市民の会」「ちいパス：NPO法人グリーンバレー」「佐渡の岩首集落を訪ねる」 最後に、くじ引きで対象とする団体を割り当てた。</p>

第二期	<p>第3回 10月20日：地域活動団体の理解 各班が対象団体の資料について、以下の6W2Hの観点で読み解いていった。(Why)なぜ活動の目的、理念、Whatなにを活動の内容Whoだれが活動の主体、関係組織、Whomだれが活動の対象者、Whenいつ活動の時期、Whereどこで活動の場所、Howどのように活動の手段、方法、テクニック、How muchいくらで活動の予算。 次に、準備、調査実施、調査終了後に分けてマナーについて学び、また、フィールドワークにあたっての留意事項について確認した。</p>
	<p>第4回 10月20日：質問づくり・ヒアリングの流れ 団体の活動内容について、現存の資料ではわからないことをリストアップしていった。団体のメンバーの思いや考え、伝えたいこと等、意識に関わることも考えた。次に、実際のヒアリングの流れを考えた。具体的には質問の流れ、質問の対象者、質問者、質問の形式、といったことについて検討し、調査の準備を行った。</p>
	<p>第5回 10月21日～11月16日：調査の実施 各班が3週間間にそれぞれの対象について調査を行った。調査の回数や時間は各班の主体性へ委ねた。</p>
	<p>第6回 11月17日：ストーリーづくり、著作権についての理解 冒頭に具体的な成果物を出す必要がある今回のプロジェクトでは「結果志向」の姿勢が重要との説明があった。また、班内の役割分担についての解説があった。次に、プロモーションビデオを作るためにはテーマを短い文章で表現し、それを具体化したものとしてのストーリーを構成する必要があることを学んだ。また、著作権についての説明があり、その際の留意事項について解説された。</p>
	<p>第7回 11月24日：ストーリーづくり ストーリーを作る意味について確認したうえで、絵コンテを作成してからストーリーを作る方法を学んだ。すなわち、①大まかなストーリーを書きだす。②①のストーリーを簡単な絵で表現、③詳細を議論しながら詰める。この方法にもとづいて各班がストーリーづくりに取り組んだ。また、このとき役割分担を決めた。</p>
	<p>第8回 12月1日：役割別研修 役割毎に分かれて、それぞれが必要とするスキルについて学んだ。役割は次の通り。リーダー、情報発信、プレゼンテーション、撮影、編集。最後に、次週までに中間発表会用のプレゼンテーションスライドを作成していただくことが宿題として出された。</p>
	<p>第9回 12月8日：スライドづくり 各班でプレゼンテーション係が作成してきたスライドを共有したのちに、第2回に鑑賞したサンプルビデオを再度、鑑賞し、プロモーションビデオにおいてポイントとなる点を確認した。その後、スライド構成とプレゼンテーションにおいて留意すべき点について説明がなされた。特に、単に団体の活動を紹介するのではなく、着眼点や切り口が重要であることが説明された。</p>
	<p>第10回 12月15日：中間発表会 3会場に分かれてそれぞれ2回ずつストーリーを発表しあった。詳細は「3.5」を参照</p>
	<p>第11回 1月5日：ストーリー決定 中間発表会の振り返りを行い、指摘された点を整理、ストーリーを推敲した。その際、以下の点について留意すべきとの助言がなされた。 ・団体についての正しい理解 ・誰にどのような局面で、どのような行動を起こしてもらいたいのか ・つかみをどうするか ・テーマを表現するための素材は十分にそろっているか 最後に次週までに試作品を作成していただくことが宿題として出された。</p>
	<p>第12回 1月12日：編集 班ごとに編集係が作成してきた試作品について議論した。また、授業の後半は、4班分の試作品を上映し、良い点、改善すべき点についてディスカッションした。</p>

第三期	<p>第13回 1月19日：編集 班ごとに編集係が作成してきた試作品について議論した。また、授業の後半は、第12回で上映しなかった5班分の試作品を上映し、良い点、改善すべき点についてディスカッションした。また、各班が対象団体に最終発表会への招待メールを送るよう指示があり、そのためのメールの文面について解説がなされた。</p>
	<p>第14回 1月26日：リハーサル 最終発表会の流れについて説明があり、1つの班を例にリハーサルを行った。次に、すべての班のビデオを上映し、改善点についてディスカッションした。また、最後に最終発表会における各班の上映前後の挨拶について、手本となる例が紹介された。</p>
	<p>第15回 2月2日：最終発表会 すべての班の作品を上映し、お越しいただいた地域活動団体の方々からコメントをいただいた。最後に、最優秀作品を選定した。詳細は「3.5」を参照。</p>



3. 5 発表会と作品

中間発表会ではこれから制作しようとするプロモーションビデオのテーマとストーリーについて、外部の方々からコメントをもらい、問題点を確認することを目的として実施した。当日は外部から7名の方々（取材対象とした団体の方、本取り組みに関心をもたれた方等）にご参加いただいた。

9グループが3会場に分かれ、それぞれ2回発表することにした。これはプレゼンテーションのスキルを磨くためには、同じ内容で複数回発表することが有効と考えたからである。そして、外部の方にも3会場に分かれてもらい、各発表について質問やコメントをしてもらった。

最終発表会では、1つの会場で全グループの作品が順に上映された。各上映の前にはグループの代表が挨拶を行った。最終発表会には中間発表会と同様に外部から15名の方々（以下、来場者）にご参加いただいた。来場者からはねぎらいの言葉やコメント、さらに今後の期待も語っていただいた。

最終発表会の最後には、参加者全員（来場者、教員、

学生）が1人1票で投票し、最も投票数が多かった作品を最優秀作品として表彰した。その結果、NPO 法人姫路地区手をつなぐ育成会のプロモーションビデオを制作したグループの作品が選ばれた。

3. 6 学生へのフィードバック

本プログラムでは教育的な意味合いから最終発表会において来場者に各作品について評価、コメントしてもらい、それを学生にフィードバックすることとした。具体的には各作品について◎、○、△の3段階で評価してもらった後に、それぞれについて簡単なコメントを書いでもらった。これを学生にフィードバックするために、今回の取り組みに関する報告書を作成、製本し、その中に評価、コメントを記載して、これを参加した全学生に配布した。

この結果をみると、まず、評価に関しては最優秀作品として選ばれたグループはすべて◎であったが、他方で、◎のないグループもなかった。また、具体的なコメントをみると、同じ作品でも「良い」とするコメントと、辛辣なコメントの両方がある場合が多かった。また、コメントの観点も多様であった。学生はこれによって2.3の3)で述べた実社会の両面性を体験することになったはずである。

4. 結果と考察

本プログラムによる学生の能動性、創造性、協働性、社会性の各側面での効果を客観的に把握することは難しい。実施の前後でこれらを評価するテストを実施することも不可能ではないが、そのこと自体が学生にネガティブな印象を与える可能性があった。そこで、今回は最終発表会の時点で上の4つの側面に関する意識を把握することとした。また、今回の取り組み自体について、学生と来場者の双方に評価してもらった。

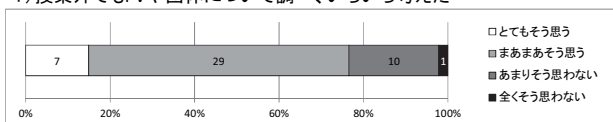
4. 1 学生の意識

最終発表会後の学生の意識を把握するために、能動性、創造性、協働性、社会性の4つについてそれぞれ4つの設問を設け、5段階で評価してもらった。結果を図2に示す。この結果はプログラムの教育効果を直接示すものではなく、それを考察するための参考情報である。

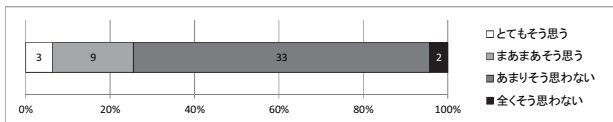
まず、能動性に関しては、多くの学生がビデオ作りを面白いと感じており(3)、また、これに取り組む意義を見出し(4)、教員にリードされるよりも学生自身が主導したいと思っていながらも(2)、授業外で自ら積極的に調べたり、考えたりするところまでは十分にできていな

能動性

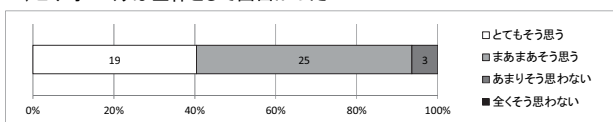
1) 授業外でもPVや団体について調べ、いろいろ考えた



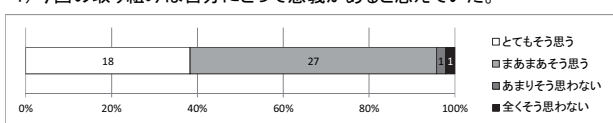
2) 先生にもっと全体をリードしてほしいと思った



3) ビデオづくりは全体として面白かった

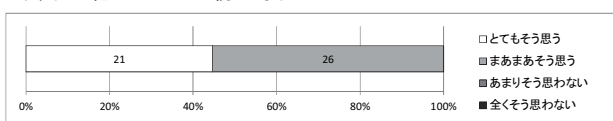


4) 今回の取り組みは自分にとって意義があると思っていた。

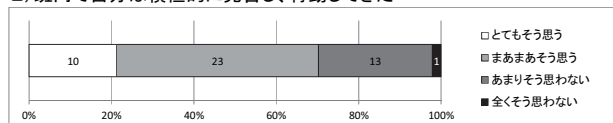


協働性

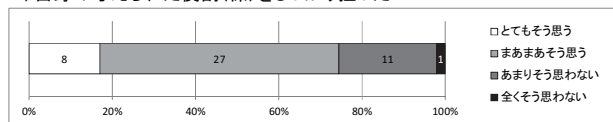
1) 班内の他のメンバーと親しくなれた



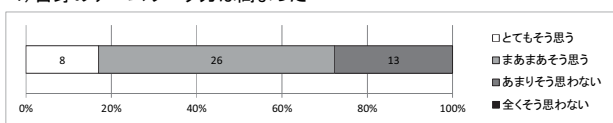
2) 班内で自分は積極的に発言し、行動してきた



3) 自身の与えられた役割(係)をしっかり担った

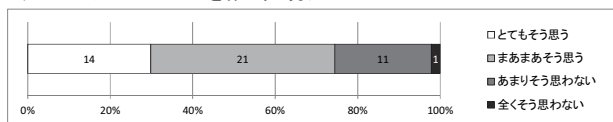


4) 自身のチームワーク力は高まった

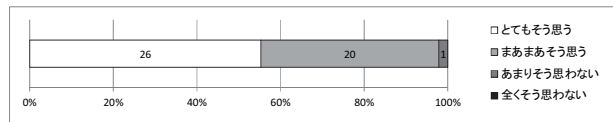


創造性

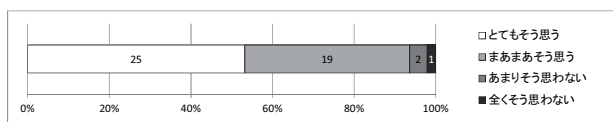
1) せっかくだからいいPVを作ろうと努力した



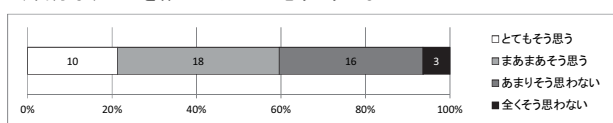
2) ビデオに自分たちなりの個性を出そうとした



3) 今回作ったPVに自分としては満足している

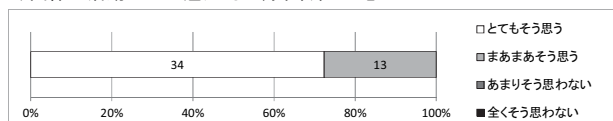


4) 自分なりにPVを作ってみたいと思うようになった

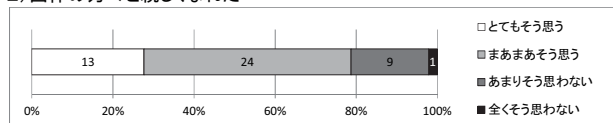


社会性

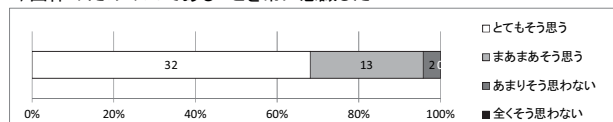
1) 団体の活動や人は魅力的で、興味深いと思った



2) 団体の方々と親しくなれた



3) 団体のためのPVであることを常に意識した



4) 地域の取り組みに参加したいと思うようになった

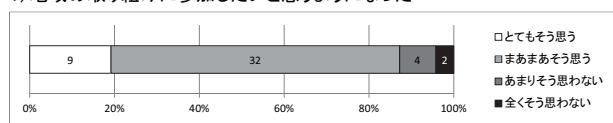


図2：最終発表後の学生の意識

かったことを示唆している(1)。能動性とはそれに取り組む意義を見出し、さらに主体的に行動することなのであるから、この点からは不十分である。課題達成にむけていかにして行動を起こさせるかが課題であるといえる。

次に、創造性に関しては多くの学生がよいプロモーションビデオを作ろうとし(1)、自分たちなりの個性を出そうとしたようである(2)。そして、その結果についても満足していた(3)。そして、今後も自分なりにプロモーションビデオを作ってみたいとする学生は「まあまあ」も含めると6割程度あった(4)。今回の取り組みは学生

の創造性への意欲を高める効果は一定程度あったことを示唆していると思われる。

第三に、協働性に関しては、グループ内で積極的に発言し、行動してきたとは思わない学生が3割(2)、与えられた役割を担ったとは思わないとする学生が2割強(3)いた。このことは一部の学生が責任を果たさなかったのか、あるいは、役割分担に偏りが生じてしまったからこのような結果となったのかははっきりしない。しかし、役割分担の仕方やプロセスにおいて必ずしも十分でなかったことを示している。したがって、グループ内での作

業の進め方や役割分担について学生同士で議論し、その責任を自覚していくプロセスを設けた方がよいといえる。

第四に、社会性に関しては、対象とする団体を魅力的で、興味深い存在と感じ (1)、それゆえにそのことを意識して、プロモーションビデオづくりに取り組んだようである (3)。そして、2割強の学生が団体の方ととても親しくなったことや (2)、2割の学生が地域の取り組みにとっても参加したいと思うようになり、「まあまあ」とあわせて9割の学生が参加したいと思うようになったようである (4)。このことは、今回の取り組みの意義であり、本プログラムの有効性を示すものといえる。

4. 2 プログラムに対する評価

次に、本プログラムについて学生と来場者の双方に評価してもらった。

1) 学生の感想

まず、学生の全体を通じた感想を表2に示す。各感想について、その内容が能動性、創造性、協働性、社会性のどれに関係するかを判定し、その結果を右4列に示した。複数に関連する場合はそれぞれに○をつけた。なお、表は個人情報保護の観点から、対象とした団体や記述した学生が特定されないよう、一部、修正してある。これをみると、学生は今回の取り組みを通して能動性、創造性、協働性、社会性のうち1つないし2つについてその重要性を実感したものと考えられる。特に、多くの学生が協働性と社会性について考えを深めたようである。また、一部の学生は作品をつくっていくプロセスの面白さや難しさを感じ、何かを創造するという事について考えを深めたようである。

次に、より具体的にビデオ制作にあって難しかったこと、楽しかったことについて、図3のように8つの選択肢 (その他を含む) から選んでもらった。これをみると「日程調整」が最も難しく、次に、「テーマ設定、ストーリーづくり」「編集」が次に難しく感じられていたことが分かった。他方で、団体へのインタビューが最も楽しく、次に、グループ内でのディスカッションが楽しく感じられていたことが分かった。このほか、技術的な面で苦労したという意見もあった。

2) 来場者による評価

次に、来場者のうち取材対象とさせていただいた市民団体の方に、今回のビデオは自身の活動の紹介に活用できるかについて尋ねた (表3)。これをみると多少の修正が必要とする意見が少なからずあり、ビデオの内容に関してはさらなる向上が必要そうである。

また、プログラム全体の評価についてこの取り組みの

継続を希望するかどうかという設問で尋ねた (表4)。多くの方が継続を希望しており、このことはこの取り組みについてある程度の評価が得られたものといえる。

そして、本プログラムに対する具体的な意見を聞いた (表5)。なお、個人情報保護の観点から団体や回答者が特定される表現を削除または修正した。これをみると全般的に良かったとする意見が多い一方で、学生のマナーに問題があるという意見や、取材日数が少なく団体についての理解が不十分ではないかという意見、また、教員との連携強化を求める意見があった。学生の能動性を重視しつつも、地域の団体と教員がしっかりと連携し、基本的なマナーについて事前に指導を行うとともに、学生の団体への取材の質と量を高めていく工夫が必要といえる。

5. おわりに

本研究では、学生が地域プロモーションビデオを制作するという初年次教育プログラムを構築し、それを兵庫県立大学環境人間学部の基礎ゼミ bにおいて実施し、その有効性や課題を、プログラム終了時点での参加学生や来場者の意識をもとに検証した。プログラムの効果、意義については以下の2点を挙げるができる。

第一に、本プログラムの能動性、創造性、協働性、社会性への効果であるが、4.1 でみたように全体的な傾向としてそれぞれ高まっており、一定の効果があったことを示している。しかし、これは学生の自己評価であるゆえに評価としては不十分である。特に、上の4つは行動として実践できてはじめて身についたといえる性質のものであり、本来ならば行動レベルの評価が必要だろう。ただ、4.2 でみたように本プログラムに参加することを通して、学生は4つの要素のうちいくつかについて改めてその重要性を実感し、考えを深めたことは確かなようである。つまり、本プログラムは、学生がこれから生きていく上で何が重要で、また、自分に何が足りないかを実体験を通して実感させたということであり、これが本プログラムの実質的な意義といえるように思われる。

第二に、本プログラムでは地域貢献という面での効果を持ちうるという点である。来場者のコメントをみると、団体の方々も学生がビデオを制作していく過程や最終的な作品から何らかの気づきをえたという趣旨のコメントがあった。そして、今回の取り組みについて「継続を強く希望する」という回答が多かった。このことは本プログラムがさらに改善されれば地域貢献に実質的に寄与する可能性があることを示しているし、そうなれば学生の教育的効果もさらに高まると考えられる。

表2：学生の感想

学生の感想	能動性	創造性	協働性	社会性
班内で協力し合うことが大切だと思いました。みんな自分に与えられた役割以外の仕事も協力していたので心強かったです。これから、ボランティアなど、地域活動で自分の興味を持てるものがあれば参加してみたいなと思いました。			○	○
社会というものがどんなものなのか、少し理解できた。				○
映像編集の中で、人に伝えるために様々な工夫をしなければならぬことがわかり、ふだん目にする映像についても意識できるようになった。また、個人の作業よりグループへの配慮が難しかった。		○	○	
このようにグループで取材や撮影と言った素材づくりから自分たちで行い最終的にプロモーションビデオを制作することには、不慣れなこともありたくさんの苦労がありました。でも、少しずつ感性に近づくとPVを編集していくことは非常にいい経験となりました。大学に入りグループ活動をするのはほとんどなかったため、このような基礎ゼミのあり方に大賛成です！			○	○
地域の活動について、今まで何も知りませんでした。どのような団体が何をしているのか知ることができ、自分も何かできたらと思いました。				○
得られたことは、人と人のつながりを持つことの楽しさだと思う。取材をとおして、団体の人々にたくさんの協力をいただき、また体験もさせていただき、楽しくPVをつくることができた。人のネットワークで活動する団体のみならず、協力して何かをなすとげるということを学べたと思う。				○
PV作成は1人でするものではありません。これからもっとこのように数人やもっと多い人数でいろいろなことをするといいと思います。なので、ここでチームですることが体験できてよかったですと感じました。				○
社会に出て、様々な団体の中の一つの団体についてだけでしたが、知らなかった世界を知ることができてよかったです。自分たちの掲げる理念の実現を目指している団体さんのことについて取材させていただき、活動内容について知ることができて本当によかったです。				○
相手の注文に対して物をつくる、というのが新鮮でした。なれない動画づくりでも苦労しましたが、できるだけ自分自身でできる努力はしました。	○			
様々な地域活動が行われていることを知れたということが、まず自分にとってとても大きな経験でした。これからの大学生活では、その次のステップとして、自分から積極的に地域活動に参加しようと思いました。				○
色々なゼミがある中で、ただ一つのグループワークでの活動を通して、協力の重要性を学びました。ただ、まだまだ皆が積極的な意見の出し合いや、行動ができなかったため、そこが残念です。最終的には、もっともっと地域活動に参加していきたいと思いました。				○
色々な活動に積極的に参加して、人脈を広げていくことが大事だと思いました。取材した団体の方ほどなにもいきいきとして素敵だと感じました。				○
今回の活動を通して、自分のコミュニケーション力の不足などまだまだ未熟な点を再確認しました。				○
ビデオ作成のための取材で実際に活動のお手伝いをさせてもらったり、地域の人やスタッフの方と接する機会があって団体の活動を知ると同時に、そのような活動をしている人々の実際の声をきけたということはとても刺激的でした。				○
班でディスカッションする際に、自分の意見を述べた人の方がだまっている人より印象がよいことや、それが制作にあたり、必要であるということも学んだ。積極的に意見を述べると人の意見をきく力は大事だと思った。				○
色々な役割があるなかで、それぞれが自分の仕事をしつつ、他の人に協力するということが出来てよかったです。				○
たくさんの活動があってそれぞれいろいろな思いをもって活動していることがわかりました。これからはさまざまな地域活動に参加していきたいなと思いました。				○
取材で見た訪問者の笑顔が最も印象に残りました。活動内で上手く連絡が取れなくて失敗したことも多々あったので、連絡はしっかり取らなくてはならないな、と思いました。				○
責任を持って自分の役割を果たさなければいけないと痛感しました。				○
チーム内で仲良くなれないと、良いPVを作ることはできないな、と思いました。最終発表で、1番のPVを見せることはできなかったけれど、チーム内で仲良くなれたし、自分の中では良いPVが作れたと思います。最も印象に残っていることは取材に行ったことです。3人しか行けなかったけど、今回の基礎ゼミで初めてであったメンバーと仲良くなれた機会だと思います。				○
やはり過程も大事だと思います。結果は出ませんでしたでしたがやりがいもたくさんありました。			○	
班内で協力して一つのものを作り上げることで自分たちの班にもつながりが生まれました。また地域の人々との交流により様々なことを学ぶことができたこと。				○
今回調査した団体のほかにも、地域のために活動する団体がたくさんあることを学びました。				○
団体との接し方 団体と関われば関わるほどよい映像ができると思いました。				○
テレビの編集の良さが分かった。			○	
団体の理解についてはとても苦労しました。なんでこんな難しいことをする基礎ゼミを選んだのだろうと後悔した時もありました。しかし、終わりの方になって、ここまで班の人と話し合い協力して一つのものを作りあげ、かつ団体の人のことを考える、という講義は今までなかったように思えます。こういう体験こそが大事ではないかと思いました。				○
撮影方法		○		
同じ班のメンバーと力を合わせて取り組む楽しさや難しさ、そしてそれにより仲がいつそう深まったと思います。				○
取材をして、活動団体をPRするには、本当に真剣に相手方のその活動に対する気持ちを理解することが大切だと思った。ただ、理解すればするほど何をPVで伝えたいのかがわからなくなってきたので、その点が難しかったと思った。			○	○
PV作りは学生主体で動く活動だったので非常にいい経験となった。自分にやる気がないと回りもごかない。自分たちの班の活動はふつうなら関係なかったがPVづくりに当てられ知る機会を得て私達にもできることがあることを学んだ。			○	○
みんなで協力することの難しさや、高校までは先生が「～しなさい」「～しなさい」だったのが自分らですべて決めて作りあげていくことの大変さや達成感を感じました。	○	○		
もっと積極的に行動すること。対象とした団体さんはみんな元気で、そのパワーにあっという間に。あまりいい取材ができなかったのでもっと積極的になればよかったと思った。	○			○
もっと自分がある地域のボランティア活動や町おこし活動に参加したいと思うようになりました。				○
私は対象とした団体さんの活動に参加したとき、体の状況や年齢が違っても、このようにひとつになつて楽しむことができるんだと思いました。子どもたちには、礼儀の正しさやあいさつなどとてもすばらしいと感じました。				○
自分自身取材に参加できなかった周りの協力のもとでやっと編集作業ができました。班の皆に感謝の気持ちでいっぱいなこと、サポートは大事なのだと改めてわかりました。PV作りは初めてだったので知らなかったことをたくさん知ることができて良かったです。				○
初めてのインタビューで、自分の知らない世界を見た気がしてとても新鮮だった。グループ内でのコミュニケーションは非常に重要だと感じた。				○
今回は、パワーポイントを使って、PVを作成したのですが、自分達が感じた、活動の楽しさや感動を余すことなく伝えられたのですが技術面で足りない部分が多く伝えきれなかったのが残念でした。			○	
自分の身近には、さまざまな団体があることを学んだ。でも、それは、自分からすすんで参加していかなければならないと思った。今回見た他の8つのPVのなかで、興味深かったものに少しでも関わりたいなと思った。				○
社会にはたくさんの組織が様々な目的をもって活動していることを実感しました。期限がある中で、できるかぎり高いクオリティのものをチームで作ってあげていく時間(作業)や体験、出会った人とのつながりが、得たものだと思います。				○
人の気持ちを汲み取る難しさ。考えることと行動することは両輪あり、どちらかだけではいけない。	○	○		
他の班員に任せてしまったこと(編集とか意見をたしたりとか)が多かったため、そういったところはなおしていかなければならないと思うようになりました。周りの人と意見を共有したり、話し合ったりすることが大切だと思ったり、自分なりの意見をしっかりと持たないといけないなと思いました。				○
ビデオづくりで自分の班だけでなく他の班もいろいろな団体の方と接することがあったけど、社会にはたくさんの団体があって、色々な活動をしているということを知れた。私も外の活動をしたいと思った。				○
相手の言いたいことを理解するのは大変だった。途中で取材の団体の担当が変わったので伝えたいことをまとめたのが大変でした。相手に関心をもつことを学びました。			○	○
今回ビデオ作成をするにあたって知らなかった団体を調べて発表したのでとても分らないことはいっぱいありましたが、団体の方のインタビューをしたり話し合いをすることで「どんな事をしていきたいか」とか「どのようにすれば市民が喜んでくれるか」という気持ちが十分に伝わってきた、そのことを一杯PVに入れたいと思いました。			○	○
インタビューに行く日程調整で最適な時間を探せるよう、”全体を見る”ことが多く、いい経験になった。				○
理解と議論は必要である。メンバー間の信頼が一番大事。			○	○

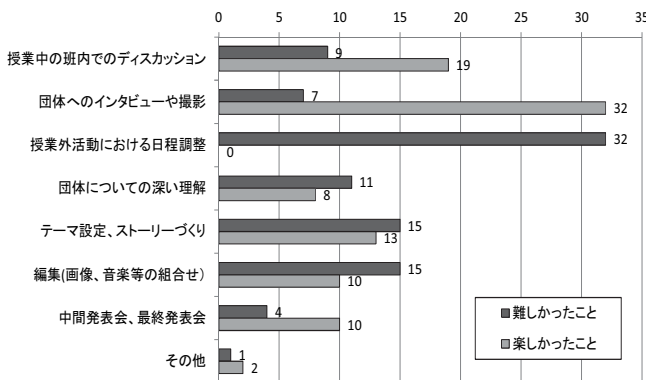


図3：難しかった点、楽しかった点

表3：来場者のうち対象団体の方々による評価

回答	人	%
このまま活用できる。	3	33
少し修正を加えれば活用できる	5	56
内容的に活用しにくい	1	11
根本的な間違いがあり、全く活用できない	0	0
総数	9	19

表4：来場者によるプログラムの評価

回答	人	%
継続を強く希望する	9	75
継続しても良いと思う	3	25
継続しなくていい	0	0
総数	12	26

表5：来場者によるプログラムに対する意見

■基本的なマナーに関すること
 連絡方法や対応の仕方など、基本的なマナーや話し方など丁寧に指導する必要があると感じた。当団体でも学生と関わる点が多いため、気になる点が多々あった。
 連絡調整の時、いつ、どこで、取材するか少し調整に手間取りました。

■ビデオ制作に関すること
 もっと深めたい...という意欲の面でつまこんでほしいと思います。
 もっと学生さんが、その団体ご深くかかわってからPVを作ると、もっと面白いのではないかと思います。(学生主導で、その団体で、何かをやってみるとか)
 授業のスケジュール等しぼりがあると思うが、撮影できる活動が期間内に限られている点、2回の取材だけという点、これだけでは活動を理解し、PRすることは不十分だと感じた。
 資料とインタビューも大事ですが活動に具体的に関わることでより本質的な物が伝えられるビデオに仕上がると思います。学生さんの思いをもう少し入れてもよかったかな・・・？
 社会の多様性に接することは大切です。求めていることとするハングリー精神をもちつけてほしいと思います。

■教員、審査員に関すること
 班の指導教官の先生と綿密に打ち合わせをしたいと感じた。
 指導される先生も団体についての理解をしておかないと、団体の活動のポイントをおさえることはできないのではないかと思います。
 審査をするのであれば映像の専門家が入るとスキルが上がると思います。
 3位、2位も発表されてもよかったかな、と思いました。

■その他
 全体的に非常によかったです。感動しました。先生方には多大なご苦労があったと思いますが、学生さんにとっては貴重な経験になったのではないのでしょうか。ありがとうございました。

姫路には色々な団体があるのでもっと学生や社会の視野を広げるとりくみにして頂ければと思います。
 普段から(ゼミとは関係なく)よかったら、いつでも、NPO活動に参加して頂けたらと思います。
 色々調整頂きありがとうございました。発見が多く、団体としても、個人としても学びある企画でした。
 PVの制作のかわりかただけではなく今後もなんらかのつながりができればと思いました。

他方、今回の取り組みを通して本プログラムの課題も明らかとなった。まず、実施上の課題としては来場者から以下のような指摘があった。

- ・基本的なマナーの指導をどう行うか
- ・団体への調査や取材の時間をいかに多くするか
- ・取り組み方や作品の質をどう深めるか
- ・団体と教員との連携をいかに深めるか
- ・今後の学生の社会参加にどうつなげていくか。

いずれも重要な指摘であり、改善していくべき点である。特に数回の取材で本当にその団体の魅力や意義は分かるのかという指摘は重要である。本プログラムが大学教育と地域連携を融合させようとする取り組みである以上、このような期待に応えていく努力は継続していかなければならない。

他方、学生からは主に以下のような要望が出された。

- ・他の授業等との調整が難しい
- ・技術的な指導や編集ソフトを充実させてほしい
- ・構想の時間よりも、作成の時間を増やしてほしい

1点目は大学教育全体に関わる点であり、通常授業期で行う以上、解決が難しい点である。しかし、2点目、3点目は改善可能であり、対応すべきものといえる。

次に、研究上の課題としては、学生の能力の評価方法が挙げられる。今回提案した教育プログラムを改善し、確立していくために、学生の能動性、創造性、協働性、社会性を評価し、また、その変化を把握する方法を検討しなければならない。プロモーションビデオの制作はそれ自体楽しめるものであるゆえに、学生の満足度を一時的に上げることは可能だが、教育プログラムとして確立する以上、本当にこれが学生の資質や能力を高めたかどうかを確認する必要があるが、本研究ではこの点について十分に深められなかった。これは今後の重要な課題といえる。

謝辞

本研究にあたっては、対象とさせていただいた9つの市民団体の方々には学生の取材に対応していただき、また、発表会にご参加いただくなど、大変お世話になりました。

した。また、NPO 法人コムサロン 21 の前川裕司理事長と森川嘉猛氏には団体選定やその他さまざまな面でサポートしていただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

河合塾編(2010)「初年次教育でなぜ学生が成長するのか
—全国大学調査からみえてきたこと」東信堂

川島啓二(2008)「初年次教育の諸領域とその広がり」『初
年次教育学会誌』第1巻第1号

経済産業省(2006)「社会人基礎力育成のすすめ」経済産
業省

谷口哲也(2012)「河合塾の「全国大学の初年次教育調査」
からみえてきたもの」『大学マネジメント』第8巻第
2号

(平成24年9月28日受付)